

Title	大邱市旧市街地に残存する都市型韓屋と細街路空間の保存に関する研究
Author(s)	羅, 羽哲
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/26181">https://doi.org/10.18910/26181</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

[ 題 名 ] 大邱市旧市街地に残存する都市型韓屋と細街路空間の保存に関する研究

学位申請者 羅 羽 哲

大邱市の旧市街地である邑城区域に残存する韓国伝統様式の都市型木造住宅（都市型韓屋）は近年の都市開発や生活様式の変化によって急速に消失してきており、居住者の減少とともに住環境の悪化が進んでいる。

本論文では、邑城区域に僅かに残る都市型韓屋の居住者の住環境意識を把握し、それらが現在どのように維持、転用されているかの実態を分析するとともに、邑城区域における街路パターンの形態的变化と都市型韓屋が接続する細街路空間の特徴を分析することで、今後の都市型韓屋と細街路空間の保存に資する基礎的要件を得ることを目的としており全5章で構成している。

第1章は序論であり、研究の目的と関連する既往研究について概要を記述し、都市型韓屋に関わる歴史的背景を概観することで本論文の位置付けを行った。

第2章では、邑城区域に残存する都市型韓屋50件の現状を調査した結果、住居専用として使用されているものが46%、商業専用18%、住商併用20%、空き家16%であり、商業専用に転用されている韓屋の約8割が1990年以降に事業者が賃借して営業していること、一方住宅として維持されている韓屋の約半数は父母世代から継承されており、現居住者の約4割が30年以上ここに居住していることなどを明らかにした。また居住者への意識調査において、都市型韓屋の住空間の満足度として、採光と通風についての評価は高い一方、安全性と断熱性についての評価が低く、特に居住期間が20年未満の居住者の評価が低いことなどを明らかにした。細街路空間については、景観、親しみなどの界限性に関する評価が全般的に高く、特に商業用途の利用者はこの地区の伝統性や歴史的価値を高く評価しており、保存地区に指定されることに賛成する意見が多いことなどを明らかにした。

第3章では邑城区域における都市型韓屋の改修状況を調査した結果、都市型韓屋の建築面積は真通地区にあるものが比較的大きく、大半が店舗に転用されている一方、その他の地区では住宅として維持されているものが多いこと、韓屋の建設年度は1945年以降に多くが建設され、1980年代からの急速な都市化とともに増改築、転用が増えたと考えられることなどを明らかにした。邑城区域内における都市型韓屋の平面類型は、邑城区域外の西城洞、仁橋洞の都市型韓屋とほぼ同様であるが、真通地区に見られる7件は異なる類型で、そのうち2件は「ロの字型」を示しており、残りの5件は朝鮮末期から1920年代までに建てられた大規模な伝統韓屋のアンチェやサランチェの部分であり、敷地が分割されそれぞれの敷地ごとに当時の建物がそのまま使用されている分割型韓屋であることなどを明らかにした。増改築に関しては「連続増築」が14件、「別棟増築」が13件、「マダン増築」が4件で「内部改修」は23件であり、「連続増築」はほとんどの類型に見られるが、「別棟増築」は「L字型」と「その他」だけに見られ、「マダン増築」は商業専用だけに見られることなどを明らかにした。

第4章では、居住者の評価が高い細街路空間の特徴を把握するため、スペースシンタックス理論を用いて邑城区域の街路パターンの形態的变化を分析し、建物現況との関連性を評価するとともに、韓屋が接続する細街路空間を分析した結果、1920年～2009年において邑城区域の街路形態の位相的中心は南側に拡散する傾向が見られること、邑城区域における細街路の位置は人の流動性を示す指数（Int. V Local）が約2.0未満で、接続角を考慮した位相的深度の指数（Angular MD）が約3.0以上であると推定されることを明らかにした。特に北西側の北内洞や西内洞と南西側の寿洞エリアは木造の住宅が多く、位相的深度も高いことからかつての細街路空間が残存していると考えられる一方、南東側の鐘路2街や東城路エリアは一部で細街路の形状は残存するものの位相的深度は浅く、周辺地域の整備が進むことで、細街路空間の生活環境も変化している可能性があることを示した。また、都市型韓屋が接続する細街路空間の特徴は街路幅が狭く、行止り街路が多いこと、また多くの街路が屈折していること、その街路に面する建物は建築面積が小さく木造の低層建物が多い傾向があることなどを明らかにした。

第5章では、本論文で明らかになった主要な事項を整理し、今後の大邱市の旧市街地である邑城区域における都市型韓屋と細街路空間の保存のための基礎的要件として提示した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 羅 羽 哲 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	阿部浩和 ( 阿部浩和 )
	副 査	教授	横田隆司
	副 査	教授	木多道宏
	副 査	准教授	小浦久子
<b>論文審査の結果の要旨</b>			
<p>大邱市の旧市街地である邑城区域に残存する韓国伝統様式の都市型木造住宅（都市型韓屋）は近年の都市開発や生活様式の変化によって急速に消失してきており、居住者の減少とともに住環境の悪化が進んでいる。本論文は邑城区域に僅かに残る都市型韓屋の居住者の住環境意識を把握し、それらが現在どのように維持、転用されているのかの実態を分析するとともに、邑城区域における街路パターンの形態的变化と都市型韓屋が接続する細街路空間の特徴を分析することで、都市型韓屋と細街路空間の保全に資する学術的知見を明らかにしている。主な成果は次のとおりである。</p> <p>1) 邑城区域内に残存する都市型韓屋の使用用途は、住居専用として使用されているものが46%、商業専用18%、住商併用20%、空き家16%であり、商業専用に転用されている韓屋の約8割が1990年以降に事業者が賃借して営業していること、一方住宅として維持されている韓屋の約半数は父母世代から継承されており、現居住者の約4割が30年以上ここに居住していることを明らかにしている。</p> <p>2) 都市型韓屋への満足度は、居住空間における採光と通風についての評価は高い一方、安全性と断熱性についての評価が低く、特に居住期間が20年未満の居住者の評価が低いこと、また細街路空間については、伝統性、景観、親しみなどの界限性に関する評価が高いことなどを明らかにしている。</p> <p>3) 邑城地区の都市型韓屋は1945年以降に多くが建設され、1980年代からの急速な都市化とともに増改築、転用が増えたと考えられること、その多くは邑城区域外の西城洞、仁橋洞の都市型韓屋とほぼ同様の類型を示しているが、真通地区に見られる7件は異なる類型で、そのうち2件は口の字型を示しており、残りの5件は朝鮮末期から1920年代までに建てられた大規模な伝統韓屋のアンチェやサランチェの部分であり、敷地が分割されそれぞれの敷地ごとに当時の建物がそのまま利用されている分割型韓屋であることを明らかにしている。</p> <p>4) 増改築に関しては「連続増築」が14件、「別棟増築」が13件、「マダグン増築」が4件で「内部改修」は23件であり、「連続増築」はほとんどの類型に見られるが、「別棟増築」はL字型と「その他」だけに見られ、「マダグン増築」は商業専用だけにみられることなどを明らかにしている。</p> <p>5) 1920年～2009年において邑城区域の街路形態の位相的中心は南側に拡散する傾向が見られること、邑城区域における細街路の位置は人の流動性を示す指数(Int.V Local)が約2.0未満で、接続角を考慮した位相的深度の指数(Angular MD)が約3.0以上であることを明らかにしている。</p> <p>6) 都市型韓屋が接続する細街路空間は「細街路長さ」と「行止り街路長さ」が長く、「行止り率」が高いこと、また「街路幅」が狭く、「屈折度」が高いなどの傾向があることを明らかにしている。</p> <p>以上のように、本論文では大邱市旧市街地に残存する韓屋が分割された朝鮮時代の伝統韓屋とそれ以降に建設された都市型韓屋であることを明らかにしており、これらの韓屋とそれが接続する細街路空間を維持していくための基礎的要件を示すことで、大邱市における韓屋保全と今後の地区整備に寄与する貴重な知見を得ている。またその成果は大邱だけでなく多くの歴史遺産都市の旧市街地保全に資するものであり、建築計画学、都市計画学の研究発展に貢献するものである。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。</p>			